もふもふと異世界で
スローライフを目指します！ 3

ALPHA LIGHT

カナデ
Kanade

アルファライト文庫

目次

第一章　エリダナの街　7
第二章　北の辺境地へ　226
番外編　木漏れ日　258

キーリエフ
エリダナの街を作った、好奇心旺盛なハイ・エルフ。
ティンファ
精霊族の血を引く少女。しっかり者だが抜けているところもある。
アディーロ
アリトの従魔となった美しい鳥。風を操るのが得意。
ドルムダ
豪快で物づくりが好きなドワーフ。キーリエフの友人でもある。
スノーティア
アリトの従魔となったフェンリル。もふもふの毛並みは最高。
レラル
妖精族ケットシーと魔獣チェンダの血を引く子。
アリト
日本から異世界アーレンティアに落ちた『落ち人』で、本作の主人公。『落ち人』について調べるため旅に出る。
CHARACTERS
登場人物
Mofumofu to Isekai de Slowlife wo Mezashi masu!
Presented by KANADE

第一章　エリダナの街

第一話　到着と別れ

『落ち人』の俺――アリトこと日比野有仁（ひびのありひと）は、仲間とともにエルフの国エリンフォードにある、エリダナの街にやって来た。

『落ち人』とは、他の世界からこのアーレンティアという世界に落ちてきた人を指す。

『死の森』に落ちた俺は、そこに住むエルフのオースト爺（じい）さんに運良く助けられ、この世界について学ぶことができた。そして自分と同じ境遇（きょうぐう）の『落ち人』について調（しら）べるため、旅に出たのだ。

オースト爺さんの助言に従（したが）い、爺さんの故郷であるエリンフォードまで来たのはよかったのだが――

「よく来たね、アリト君！　待っていたんだよ！　さあさあ、早く話を聞かせておくれ。

オーストから君を保護したという手紙を貰ってから、アリト君と会いたい、話したいって何度も手紙を送ったのに、あいつは全部無視してくれたからね！　しかも、今度は君を旅に放り出したなんて言ってさ。その時の手紙には、エリダナへもいつかは行くだろうとあったから、もう、君に会いたくてずっと待っていたんだよ！」

あまりの勢いに圧倒されてしまった。

森と平原の境にあるエリダナの街に着くやいなや、あれよあれよという間に立派な屋敷に連れてこられた。すると、門の前でこのエルフの男性が待ち構えていたのだ。

「さあさあ！」とエルフの男性に腕を引かれ、そのままの勢いで背中を押されて屋敷に連れ込まれそうになったところで、やっと声を出す。

「ちょ、ちょっと待ってくださいっ！　あ、あのっ、まだ旅の連れがいるので、ちょっと待ってくださいっ！」

俺の後ろにいる旅仲間のエルフ――リナさんと、精霊族の血を引く少女のティンファは、エルフの男性の勢いに呆然としている。

俺の従魔のスノーことスノーティアとレラルは、エルフの男性を見上げながらちょろちょろしていた。

「ん？　ああ、アリト君のお友達かな。どうぞ君たちも入りなさい。今日はもう遅いから、今晩は皆で泊まっていくといいよ。アリト君はこっちだ！　さあさあ！」

エルフの男性は二人に視線を向けて頷くと、またニコニコと笑いながら俺の手を握り、屋敷の庭へ向かって歩き出した。

「えっ、うわっ、ちょっと待ってくださいっ!!」

ぐいぐいと、見かけによらない強い力で男性が屋敷へ連れ込もうとするのを、俺は何とか必死に足を踏ん張って耐える。

「貴方はキーリエフさん、ですか？」

恐らく間違いないと思うが、この男性が、オースト爺さんがエリダナに行ったら会うといいと紹介してくれた人物なのだろうか。まずはそこを確認しないと。

「ん？　そうだよ。僕はキーリエフ・エルデ・エリダナートだよ。君を保護したオーストとは古い馴染みでね。よろしく頼むよ。というわけで、さあ行こう、アリト君！」

そう名乗るやいなや、再び俺の手をぐいぐいと引いて奥に連れて行こうとした。

キーリエフさんの見た目は、どこか神経質そうな顔立ちの、細身の初老紳士だ。

それなのに、目をキラキラさせていたずらっ子みたいな表情で俺の手を引く姿は、とてもオースト爺さんと同じ長い時を重ねているようには思えない。

顔は、ロマンスグレーな美形のおじ様、って感じなのに。

なんだ、この人は！

俺がエリダナの街のことを考えると嫌な予感がしていたのは、絶対この人が原因だよなっ！

「いやいや、とりあえず一度落ち着いて話をしましょう!!」

◆　◆　◆

エリダナの街が見えたのは、夕暮れが近づいてきた頃だった。

ロンドの町を出ていくつか森や林を抜け、草原を歩いていると、遠くに森と街の姿が見えてきたのだ。

「うわぁ、なんかいかにもエルフの街って感じだな！　凄い……」

目を見開きながら、思わず言葉が口から出ていた。

街の周囲の壁は今まで訪れた街よりも低く、恐らく二メートルほどだろう。ただ、街壁の上には間隔をおいていくつかの塔があり、その上には警戒する兵の姿が遠くからでも見てとれた。

近づいていくにつれて赤茶の屋根が街壁の上から覗き、その奥には街壁よりも遥かに高いたくさんの大木がそびえ立っている。

大木の森の木々の合間には、樹上に建てられた家々やそれらを結ぶ通路があり、それは圧巻の景色だった。

その家々も、ミランの森でお世話になったリアーナさんの家よりかなり大きく、恐らく二階、三階建てのものもあるだろう。

「ふふふ。ここはエリンフォードが建国されてから、王都の次に作られた街なの。それまではエルフも妖精族も精霊族も、森や霊山にそれぞれ集落を作って一族で住んでいたのよ。でもキーリエフ・エルデ・エリダナート様が、外の世界も知るべきだと森の境界に街を作ったの。それが、このエリダナの街の始まりね。そして後からエルフの知識を求めて来た外部の人たちが草原側に街を作ったの。だから、この街は森と草原とにかかる街なのよ」

エリダナの街は、エリンフォードの国の中でも特殊だってことか。この街ができて森から出てきたエルフたちが少しずつ暮らしの範囲を広げていって、今のエリンフォードまで発展した、ということだな。

「ふわぁ。凄いですね！　聞いたことはあったのですが、こんな街だとは思いませんでした！」

ティンファも目を輝かせている。

エリンフォードでも、こんな街はエリダナだけだものな。なんかわくわくしてきた！

『アリト、見えないからだっこして？』

「お、レラル。ほら、見えるか？」

小首を傾げながら見上げておねだりしてきたレラルを抱き上げ、街が見えるようにする。

レラルは妖精族ケットシーと魔獣チェンダの血を引く珍しい子で、二足歩行になったり、獣姿になったりできる。今は森を出たので猫を一回り大きくしたような獣姿だ。

『うわぁ！　ここも大きな街だね。なんだか面白いよ。中に入るのが楽しみだね』

ミランの森から出たことのなかったレラルは、耳をピンと立てて初めての街に興奮していた。

まあ、俺も街の姿が見えて、わくわくしてきているけどな！

「うん、どんな街か楽しみだよな！　よし、さっさと街へ入ろうか！」

こうして俺たちは遠くに街を見ながら急ぎ足で歩き、暗くなる前に無事に門のところまでたどり着いた。

「エリダナの街へようこそ。身分証明書とギルドカードを見せてください。入街料金は銅貨一枚になります」

フェンリルであるスノーや、レラル、鳥型魔獣のウィラールであるアディーことアディーロを見てもにこやかに笑って迎えてくれた門番の人の耳は尖っていた。

スノー、レラル、アディーは皆俺の従魔だが、子供が従魔を連れていると怪しまれたり、従魔自体を警戒されたりするのが普通だ。

でも、ここは多種族が暮らす街だからか、スノーたちを見てもまったく驚かない。もちろん、スノーとレラルは種族がバレないように姿を一般的な獣サイズに変えているけどな。

さて、身分証明書は、どちらを出せばよいか。

オースト爺さんが用意してくれた身分証明書は、俺の本名のヒビノ姓と、オースト爺さんのエルグラード姓の二つがある。

悩んでいる間に、リナさんとティンファが手続きを済ませた。

「アリト君？」

「あ、あの。じゃあこれを」

ヒビノ姓のほうを出しても、すぐに爺さんの関係者だとバレる気がするんだよな……。あとで騒ぎになるのも面倒だし、だったら……。

おずおずと、ギルドカードと一緒に初めて『アリト・エルグラード』の身分証明書を差し出した。

「!!　こ、これは……」

ああ、やっぱり。なんとなく門番には俺が来ることが通達されているような気がしていたよ……。

オースト爺さんは、キーリエフさんに手紙を出していたみたいだし。

まったく、指名手配か！

「し、失礼しましたっ!!　すみません、どうぞこちらへお越しください」

「え、いや。とりあえず、キーリエフさんには明日伺いますとお伝えいただけますか？今は同行者もいますし、街で宿をとりますので」

うわあ。スノーたちを見ても余裕だったのに、エルグラード姓の身分証明書で門番さんが慌てるって。

リナさんは「あちゃー」って表情で見ているし。ティンファはぽかーんってしているけどな……。

「いや、そういうわけにはいきませんので！　ちょっと失礼します」

「えっ？」

「じゃあ、これで」と適当に挨拶してさっさと退散しようかな、とか考えていたら、門番が懐から小さな横笛のようなものを取り出し、思いっきり吹いた。

ええっ！　何をしたの？　……ん？　でも音が出ていないよな。

「あの、通ってもいいですか？　後ろに待っている人もいますので」

「ああ、申し訳ありません。どうぞこちらへ」

俺が後ろの順番待ちの列を示すと、門番は門の脇へ誘導しようとした。

「いえいえ。街の中へ入れてくれたらそれで……」

俺はそう言って手を振り遠慮する。

そんな押し問答をしていると、バサバサという音とともに大きな鳥型魔獣が一羽、門の脇の開けた場所に下りてきた。

嫌な予感がしながら魔獣を見ると、その背からタキシードのような黒い服を着た初老の人が飛び降りた。

「貴方がアリト様ですね？　お待ちしておりました。どうぞこちらにお乗りください」

真っすぐに俺の前に来て、執事のごとく折り目正しく一礼したその人を見て、嫌な予感が当たったことを知る。

「えっ？　いや、あの、旅の同行者もおりますから、明日こちらから伺わせていただきます」

「いえ。主人がお待ちですので、どうか今すぐお越しください。皆様もご一緒に」

「いや、あのっ！」

門番の時から俺は、ずっと断っているんだけど！

「さあお乗りください。主人が首を長くして待っておりますので。失礼いたします」

魔獣に乗る気はないのに、迎えに来た執事らしき人が再度一礼して頭を上げた時には、俺の身体が浮いていた。

「うわあっ⁉」

「えっ？　きゃあっ」

「きゃっ！　う、浮いていますっ⁉」

俺が声を上げたと同時に後ろからも慌てる声が聞こえたので、リナさんとティンファも一緒に宙に浮いたのだろう。

『ぐるるる。アリト、この人悪い人？　スノー、やっつけてもいい？』

「うわっ、ダメ！　ダメだスノー！　とりあえず大人しくしていて！」

恐らく魔法だろう。ふわっと身体が宙へ浮いたと思ったら、俺たちはあっという間に鳥型魔獣の背にいた。レラルも一緒だ。スノーは最初こそ抵抗していたが、俺が宥めると自ら魔獣の背に飛び乗る。

「すみません、強制的に乗せさせていただきました。ゆっくり飛びますが、立たないようにお願いします。では行きますよ」

返事をする前に、あっという間に空へ飛び立つ。オースト爺さんの従魔ロクスのようにビュンッとではなく、ゆっくりとだったが。

「……飛んでいるわ」

「凄いです！　空を飛んだのは初めてですね！　うわぁ！　とっても高いです！　街の人があんなに小さく見えますよ！」

……ティンファって凄く肝が据わっているよな。俺たちは無理やり連行されている最中だっていうのに。

呆然としている間に草原に広がる街の上を過ぎ、木々の間の建物を見下ろす。
空から見た樹上の街は、遠くから見た時よりもさらに幻想的だった。木々の間にはいくつもの通路が掛けられ、それに繋がれた家々がはっきりと見える。
日本では考えられない光景に圧倒されていると、あっという間に街の奥側にある街壁までたどり着き、地面へと降りていった。
降り立ったのは街壁のすぐ傍にある、木の下に造られた大きな屋敷の前の開けた場所。
そして、そこで待ち構えていたキーリエフさんに捕まって今に至るわけだ。

◆◆◆

「ほお、これは美味しそうだね！　では、いただくとしようか。礼儀作法は気にしなくていいから、皆さんも好きに食べなさい」
キーリエフさんが屋敷の食堂のテーブルに並んだ料理を見て笑顔になる。
「おうおう！　これは美味そうだな！　魚とは、いいねぇ。酒が進むってもんだぜ」
ガハハハハ！　と笑いながらジョッキに入った酒を片手に、焼いた魚の干物を食べだしたのはドワーフのドルムダさんだ。
この人にもオースト爺さんが紹介状を書いてくれていた。でも、爺さんの手紙にはツウ

エンドの街にいるって書いてあったのだけどな。
屋敷の前でキーリエフさんと押し問答していたところに、あの後ドルムダさんが乱入してきたのだ。
ドルムダさんには、オースト爺さんがマジックバッグなど、俺と作った物の品定めを頼んでいたそうだ。俺がこれからエリダナの街へ行くと爺さんに伝えたので、爺さんは手紙にそのことを書いてドルムダさんに送ったらしい。
俺の訪問を待ちわびていたドルムダさんは、それを読んで、すぐにエリダナの街へ来たという。キーリエフさんとも古い知り合いなのだそうだ。
「俺のほうがずっとこいつを待っていたんだから、俺が先だ！」
「なんだと！　この街へは僕を訪ねて来たんだから、僕が優先に決まっているだろう！」
どちらの用事が先かとドルムダさんとキーリエフさんが屋敷の玄関で揉め始めた時に、もう面倒になって二人にこう囁いた。
『もうすぐ夕食の時間ですよね。俺が今から異世界風の料理を作りますので、皆でとりあえず夕食にしましょう』
俺が『落ち人』であることは爺さんから伝わっているはずだから、きっと食いついてくると思ったのだ。
予想通り効果は抜群で、即座に争いをやめた二人は揃って屋敷の食堂まで案内してく

れた。

今日は宿で旅の疲れを癒したかったのだが、仕方なくキーリエフさんたちに付き合うことにしたよ。もちろん、リナさんとティンファもだ。諦めが肝心だよな……。

屋敷の料理人に許可を取って、もう仕込み始めていた料理はそのままに、俺が何品かおかずを追加で作らせてもらった。

料理長のゲーリクさんは一見、気難しそうだったからどうしようかと思ったけれど、俺が料理を作っている間、熱心に質問してきた。話してみたら気のいい人だったよ。

作ったのは湖で獲った魚で作った干し魚を焼いたものと、マヨネーズを使ったポテトサラダ。あとはハンバーグだ。

ハンバーグのたれは、ロンドの街で買ったマトンの実を細かく切って煮込んだトマトソース。マトンの実は熟していないトマトよりもさらに青臭さがあったが、甘めの玉ねぎのような根菜と煮込むことで、なんとかトマトソースに近い味になった。

「美味い！　これは何を使って味付けをしているんだい？　こんな味は初めて食べたよ」

ポテトサラダを食べて興奮しているキーリエフさんは、オースト爺さんと同じくマヨラーになりそうだ。

「うめーな、これは！　美味い肴があると酒が進むってものよなっ！　ガハハハハッ」

ドルムダさんは干し魚とハンバーグを食べながら、ガブガブと酒を飲んでいる。

ドワーフのドルムダさんは小柄な俺よりもさらに背が低く、がっちりとした体格だ。腕は筋肉が盛り上がり、樽のような腹まで伸びた長い髭を三つ編みにしていた。

やはりドワーフは酒が好きな種族なのだろうか。酒の肴になる料理はまだ他にもある。ガーガ豆を塩ゆでしたら枝豆のような味だったし。あとはジャガイモと似た味の芋もあるから、フライドポテトとかも作れる。まあ、これから小出しに作っていこう。

俺とリナさん、ティンファにレラルとも同じテーブルで、キーリエフさんは色々食べては満面の笑みを浮かべた。

「ちょっと、アリト君。今までこんなの作ってくれたことなかったじゃない！　すっごく美味しいわね！」

「ほわぁ。何ですかこれ？　何を使ったらこんな味になるのかさっぱりですが、美味しいです！」

最初リナさんやティンファは、貴族だというキーリエフさんたちと同じテーブルで緊張して落ち着かない様子だったが、今は夢中で料理を食べている。

まあ、屋敷前に現れたキーリエフさんの態度からは、気難しい感じなんてまったくしなかったしな。

「アリト！　とっても美味しいよ！　焼肉もいいけど、これも好き！」

うれしそうにそう言ったレラルの口の周りは、トマトソースだらけだ。

ニコニコなレラルを撫でながら、そっと口の周りを拭いてあげたら、にぱあって笑った。うん、可愛い。

俺が食事を作っている間に、皆は改めて自己紹介をしたそうだ。

レラルはケットシーとチェンダの混血だと、初めに伝えてある。リアーナさんから、キーリエフさんには言って大丈夫だと聞いていたからだ。今のレラルは獣姿からケットシーの姿になり、椅子に座ってスプーンやフォークを使って食べている。

俺を街の門まで迎えに来た人は、やはりこの家の執事だったらしく、料理をしている間に挨拶してくれた。ゼラスさんというそうだ。

無理やり連れてきたことに対してお詫びしてくれたのだが、まあ、キーリエフさんのあの様子では仕方ないことだったと謝罪を受け入れたよ。

その時に、リナさんとティンファは客室に案内したと報告もしてくれた。

とりあえず今日のところは食事で気を逸らすことに成功したみたいだし。明日も何とかごまかして、ティンファをおばあさんの家に送っていこう。

故郷に向かう途中だからと付き合ってくれたリナさんも、エリダナの街を明日発つかはわからないけれど、少なくともこの屋敷は出ていくだろうしな。

俺も本当はこんな大きな貴族のお屋敷にずっと滞在するのは遠慮したいが、たぶん離れるのは無理だろうと諦めた。

レラルも好きに過ごせるし、スノーも自由にしていられるのはありがたいけど。

これからどうなることやら。

とりあえず今晩はゆっくりスノーをもふもふして癒されたい。なんだか凄く疲れたよ……。

昨晩は部屋へ案内された後、スノーとレラルを存分にもふもふしてから眠りについた。

用意してもらった部屋は、品の良さが漂う趣のある部屋だった。それとなく置かれている家具は、恐らく名のある人が作った物だろう。

大きなベッドもあったが、床にスノー用のクッションと布団を敷いて、いつものようにスノーのお腹で寝た。お屋敷の部屋なんて、庶民には居心地が悪いよな。

そして、今日は普段通り早朝に目が覚めた。

視界に見慣れない天井が映り、今自分がいる場所を思い出す。

それと同時に昨日の騒ぎを思い起こしてげんなりし、今日は何としても、キーリエフさんたちに捕まる前に、ティンファやリナさんと一緒に街へ行こうと決意した。

「よし！　とりあえず朝食を作って、ゼラスさんに言って街へ案内してもらおう」

料理長のゲーリクさんに頼めば調理場を使わせてくれるよな。さっさと支度をしよう！

『おはようなの、アリト』

「おはよう、スノー。アディーもおはよう。今調理場へ行ってご飯を用意するから、一緒に来てくれ」

『ふん。仕方ないな』

アディーは相変わらず無愛想だ。まぁ、それでも付き合ってくれるあたり、優しいのだけどな。

着替えてから浄化の魔法を掛けて身ぎれいにすると、すぐさま部屋を出て調理場へ向かう。

「おはようございます、アリト様」

「おはようございます、ゼラスさん。様はやめてください。この通り若造なので、呼び捨てでお願いします。それですみませんが、朝食を作らせてもらってもいいですか？　それと、食べたらすぐ街へ出て、ティンファをおばあさんの家まで送っていきたいのですけど」

「ゲーリクに言ってくだされば、調理場はご自由にお使いいただいてかまいませんよ。食事の支度までお気遣いくださりありがとうございます。申し訳ありません、あの通り興味を持った方に対しては子供のように振る舞う主ですので。街へはご案内がてら、私が馬車で送らせていただきます。ではお二方が起きられましたら、調理場の脇にあるダイニングへ案内しましょう」

「ありがとうございます。街までよろしくお願いします。では調理場へ行きますね」

ゼラスさんには、朝食でキーリエフさんとドルムダさんの気を引いた隙にこっそり出かけようという俺の意図が通じているな。さすが執事さんだ！

広い廊下の真ん中を、両端にある調度品に触らないようにスノーとアディーを連れて進む。調理場へ着くと、朝食の支度を始めていたゲーリクさんに声を掛けた。

スノーたちは自分で浄化を掛けていつも身ぎれいにしているが、さすがに調理場へは入れられないので、入り口で待っていてもらう。

「おはようございます、ゲーリクさん。すみませんが、朝食のおかずを足してもいいですか？」

「おはよう。……キーリエフ様か？」

「はい。連れを街まで送っていきたいので……。昼の分のおかずも作りますから、温めて出してもらえませんか？」

「まあいいだろう。その代わり俺も一緒に作るぞ」

「はい。素人仕事で恐縮ですが。あ、スノーとアディーのご飯を先に作らせてもらいますね」

「ああ」

ゲーリクさんの口調はぶっきらぼうだけど、いい人だ。体形が、今まで見たどのエルフ

の人よりも大柄でゴツイ。胸板は分厚い筋肉に覆われ、まくり上げた袖から覗く腕も逞しい。もしかするとエルフ系の混血なのかもしれないな。

まあ、もう俺は「エルフ＝クールで知的な美形」なんて幻想は抱いていないぞ。

「お待たせ、スノー、アディー。ここに置いておくな」

『死の森』の魔物の肉を焼き、二人に出す。

続いて朝食の準備だが、ゲーリクさんはまだパンの仕込みをしただけだというので、おかずを全部作らせてもらうことになった。

「もしかして、それは辺境地の魔物の肉か？」

「はい、そうです。二人とも俺にはもったいないくらいに強いので、上級の肉じゃないと魔力を十分に補給できなくて。お世話になったオースト爺さんが、定期的に手紙と一緒に肉も送ってくれるんですよ」

旅に出て様々な動物や魔物の肉を食べたが、やはり『死の森』の魔力濃度の高い肉が一番美味しかった。

ちなみに肉を収納しているマジックバッグのことは、ドルムダさんもいるしキーリエフさんも知っていたので、この屋敷では隠していない。

「オースティント様か……。さすが『死の森』の魔物の肉だな。森の奥地か霊山の魔物にしかありえない魔力濃度だ」

オースティント「様」、ね。爺さんの名前を出すのは気をつけないといけないな。

「あ、使いますか？　まだいっぱいありますし、良かったら他の素材も色々出しますよ」

「……夕食はその肉で何か作ってくれ。それをメインにする」

「はい。では後で肉の種類を見せますね」

昨日部屋に案内してもらいながらゼラスさんに聞いたところ、この家にはキーリエフさんしか住んでいないそうだ。領主館は街の別のところにあって、息子さんたちはそちらで暮らしているらしい。

だから普段この家には、執事のゼラスさんと料理長のゲーリクさん、そしてゲーリクさんの奥さんでもあるメイド長のナンサさんと、使用人の男性一人しかいないそうだ。

何かあれば領主館から人を呼ぶという。今はドルムダさんが滞在しているので、昼間に領主館から二人、メイドさんが来ているようだ。

「あ、ゲーリクさんたちはもう朝食は食べられたんですか？　まだだったら全員分作りますよ」

「ではいただこう。味見だけよりもしっかり食べたほうが味をよく確認できるからな」

昨日、俺の料理の味見をしてもらったら、ゲーリクさんの態度が柔らかくなった。

味を認めてくれたのだろうと思うと、とてもうれしい。ゲーリクさんが作った料理は、旅に出てから食べたもののうちで一番美味しかったから、なおさらだ。

「まあ、色々な調味料を使っているだけですけどね。よかったら後で調味料の作り方もお教えしますよ」

「……いいのか？　じゃあ頼む」

昨日料理に使ったマヨネーズを作った時、ゲーリクさんは味見をして目を見張っていた。それから何も言わずに、俺の作業を見守ってくれたんだよな。

他にもウスターソースにコンソメ、それにデミグラスソースやトマトソースもある。

今まで俺が作って出した料理は、この世界の人の舌に合っているようで、皆が美味しいと言ってくれている。美味しいものをどこでも食べられるようになれば俺もうれしいから、皆にもぜひ使ってもらい、さらに改良なんかして広めてくれたらいいよな！

まぁ、だからといって、俺が表立って売ったり広めたりはしたくないのだが。

「では作っちゃいましょうか」

パンを窯に入れて手の空いたゲーリクさんと一緒に、全員分の朝食の準備をすることにした。

屋敷の食糧庫にあるものを自由に使っていいということなので、見たことのある食材を持ってくる。

食糧庫には、俺の知らない食材が大量にあった。でも今は急いでいるので、味を知っている材料で作ることにする。未知の食材は、今後のお楽しみってことで。

足りなかった素材や調味料は、カバンから取り出して調理台に並べていく。それを、ゲーリクさんは横で興味深そうに見ていた。

「朝なので、野菜のスープとオムレツ、しゃぶしゃぶにしたお肉と生野菜のサラダを作りましょう。昼食用には、シチューを用意しますね」

ロンドの町で大量に卵と乳を買ったので、椀飯振る舞いだ。あまり保存がきかないためか、さすがに食糧庫にも卵と乳はなかったからな。

料理長であるゲーリクさんに補助をお願いするのは申し訳ないけれど、今は急いで作って逃げないと、昨日のようにキーリエフさんに捕まってしまう。さっさと作ろう。

スープとシチュー用の野菜の下ごしらえをゲーリクさんに頼み、俺はいつものように二つの鍋に水を出して火に掛け、出汁用に干し肉を削って入れる。

そこにゲーリクさんに刻んでもらった野菜を入れ、マトンの実も皮を剥いてから細かく切って加えた。ミネストローネ風スープだ。

もう一つの鍋には大きめに切ってもらった野菜と、鶏肉に似た味の肉を切って入れる。灰汁を取りながら次の料理の準備だ。

シチュー用のホワイトソースは、小麦粉と乳をだまにならないようにあらかじめ混ぜておき、別の小鍋でゆっくりと弱火でとろみを調節しながら作る。バターはないが、それっぽくはなった。

キーリエフさんもドルムダさんもまだ起きてこないから、今のうちだな！

オムレツは、俺が説明しながら一度作ってみせたら、次はゲーリクさん一人で作ってくれた。

この間見つけたフレッシュチーズのムームンを入れてみたので、とろけたチーズの風味がして美味しいぞ。植物油を使ってふわふわに仕上げたら、ゲーリクさんにかなりの衝撃を与えたみたいだ。

サラダ用のドレッシングにも植物油を入れて作ってみせると、それにも驚いていたよ。こちらでは生野菜を塩や果汁のみで食べるらしい。

そうやってゲーリクさんに説明や味見をしてもらいながら料理を作り、丁度朝食の準備が終わった頃に、ゼラスさんがリナさんとティンファが起きたことを教えに来てくれた。

そこで後はゲーリクさんに任せて、俺も朝食にする。シチューは味付けを済ませ、お昼には焦がさないよう温めてくださいとお願いした。

「おはよう、アリト君」

「おはよう、リナさん。ティンファもレラルもおはよう。朝食を食べたらゼラスさんが街へ案内してくれるから、ティンファをおばあさんの家まで送っていくよ」

ちなみに、ゼラスさんにも俺たちと一緒に朝食をとることを勧めておいた。キーリエフさんは、いつももっと遅い時間に起きるみたいだしね。

「ありがとうございます！　私もこの街へ来たのは初めてで、おばあさんの家もわからなくて。一人では不安だったので助かります」

「ふふふ。じゃあ私もティンファちゃんを送ってからギルドへ顔を出して、明日か明後日にはエウラナへ出発するわ」

「わかりました。では街を案内してもらいながら、ティンファのおばあさんの家を探しましょうか」

丁度俺たちが食べ終わる頃にキーリエフさんが起きてきたけれど、朝食を出したら目を輝かせて食べだしたので、その間に食堂をそっと抜け、支度して屋敷を出た。ふう。

ちなみにムームンを入れたオムレツは大好評だったぞ。ゲーリクさんもムームンの味に唸っていたから、ロンドの町でしか買えないことと、日持ちがしないことを伝えておいた。

「すみません、ゼラスさん。ありがとうございます」

今はゼラスさんが出してくれた馬車で移動中だ。馬車は目立ってしまいそうだからと一度は辞退したが、小型の馬車を出してくれたので、それに乗せてもらうことにした。

この馬車は荷馬車でも幌馬車でもなく、小型の黒塗りのいわゆる箱馬車だ。

箱馬車はナブリア国の王都で見かけたが、まさか自分が乗ることになるとは思わなかった。

しかもこの馬車、発明家で有名だというキーリエフさんが作っただけあって、揺れが少なくてお尻も痛くならない！　サスペンションを発明したのか凄く気になるから、後で聞いてみよう。

ゼラスさんにティンファのおばあさんの手紙にあった住所を見せたところ、森の方の街にあるとのことだった。

でも街の案内も兼ねて、平原の街まで回ってくれている。キーリエフさんの屋敷は街の一番奥なので、ぐるっと大回りする感じだ。

「本当に凄いですね……。数回だけ荷馬車に乗ったことがありますが、とても揺れて座っているのも大変でした。でも、この馬車は全然揺れませんね」

「ええ、凄いわよね。でも、あのキーリエフ様の馬車だと思えば納得だわ」

ティンファもリナさんも、感心しきりだ。

「アリトさんが、キーリエフ様とお知り合いだとは思いもしませんでした」

「いやいや、俺じゃないからね！　昨日も言ったけど、あくまで俺を育ててくれた爺さんの古い知り合いだから！　なんか爺さんが手紙で色々知らせていたらしくてさ……。俺もこんなことになるとは予想外だったんだよ」

嫌な予感はしていたけど、まさか街に着いた瞬間に、あんな展開になるとは思わなかったのだ。

ティンファはこの国の生まれだから、当然キーリエフさんのことは知っていた。

俺は爺さんの知り合いを訪ねるとは言ったけど、キーリエフさんの名前は出さなかったから、驚かせて悪いことをしたな。こんなことになるのなら、あらかじめちゃんと説明しておくべきだった。

「まあ、キーリエフさんがあんな感じだし、俺はしばらくあの屋敷に滞在していると思うんだ。ティンファも何かあったら訪ねてきてくれな。アディーに手紙を持たせて送るから、たまには会って街でも見て回ろう。せっかくだし、最後にリナさんとも観光したかったんだけど……明日も屋敷を抜けられるかはわからないので」

「まあ、アリト君。またそんなことを言って。ガリードも言っていたでしょ。商人ギルドへ行けば、たぶん手紙が来ていると思うわよ？　これっきりにするつもりは私たちにはないんだし、そんなお別れみたいなこと言わないで。それに、ナブリアへ戻る前にモランを使いに出すから、その時はまた一緒に街を回りましょう」

リナさんもそうだが、冒険者パーティ『深緑の剣』の皆は本当にいい人だ。リーダーのガリードさんも、元気にやっているかな。

「……はい、わかりました。そうでしたね。ガリードさんに手紙を出さないとですね」

「そうよ。エリダナにしばらくいるのなら、手紙を出しておかないとうるさいわよ？」

「わかりました。帰りに商人ギルドへ寄ってみます」

ナブリア国の王都を出る時に面倒をかけてしまったし、ガリードさんたちにはお礼の手紙を書くと約束していたんだっけ。

約束、か。いつの間にか、俺もこの世界で約束をする相手ができていたんだな……。

オースト爺さんも、俺が旅に出た後もこうして気にかけて、色々と手を回してくれている。

なんだか、ちょっとくすぐったい気持ちになるな。

祖父母を亡くしてから、こんな気持ちになったことは一度もなかった。

何かを察したのか、すり寄ってきたスノーとレラルを撫でる。その温かな体温を感じながら、気恥ずかしさを噛みしめていた。

◆　◆　◆

エリダナの街は、馬車の小さな窓から見ていても幻想的で綺麗だった。

森の部分の街で、木の上だというのに、なぜあんなに大きな建物が建っていられるのかと不思議がっていたら、リナさんが建物の中にも木の枝を通し、魔法を使って支えているのだと教えてくれた。

森で暮らしている昔ながらのエルフの集落では、そうやって家を建てているそうだ。この

のエリダナの街ほど、大きな建物は造らないということだったが。

木の上に家を建てる理由は、森の奥でも魔物や魔獣に襲われることなく安全に暮らすためだそうだが、今では普通に地面に建てた家で暮らすエルフも多いという。

道から見上げる樹上の家々やそれを繋ぐ木の回廊はとても幻想的で、ここが異世界だということを実感させられた。

森を出てすぐの場所には木で作られた古い街並みが、そして森から離れていくにつれ、石やレンガのような土で造られた家々が広がっている。

平原の街にも所々に木が植えられた公園などがあり、中世ヨーロッパを思わせる街並みだ。

レンガなどで造られた家は四、五階建てのものが多く、ナブリアの王都で見た家よりも近代的な建物であるだけに、森の住居との対比で独特の雰囲気が生まれていた。

「ここがお探しの住所になります。どうされますか？」

「ありがとうございました、ゼラスさん。帰りは歩いて戻れますので、ここで大丈夫です。夕方前には屋敷へ帰りますから、キーリエフさんにはそう伝えてもらえますか？」

「はい、わかりました。もし屋敷の場所がわからなくなりましたら、街の警備兵へ言ってくだされば案内いたしますので」

それは俺のことは警備兵に周知してある、ってことなのか？　門での出来事といい、俺

のことをどこまで通達してあるのだろうか……。キーリエフさんの客人ってだけだったらいいのだが。

「わ、わかりました。案内していただいて、ありがとうございました」

「「ありがとうございました」」

俺に続き、リナさんとティンファも頭を下げた。

遠ざかる馬車を見送ると、ティンファのおばあさんの家を振り返る。

その家は、平原の街から森へ入ってすぐの木の枝の上に建っていた。地上からでも上れるように、木の階段もある。こぢんまりしていて、いい雰囲気の家だ。

「どうする、ティンファ。一人で行けるかい？」

「……はい。この手紙を見せてみます。あの、アリトさんとリナさん、ここで待っていてくれますか？」

「いいよ。待っているね」

「ふふふ。いいわよ。行ってらっしゃい」

「はい！」

ニッコリと笑ったティンファは階段を一人で上がっていき、その後ろ姿をリナさんと一緒に見送る。

しばらくの間、リナさんと街のことや今後の予定について話していると、ティンファが

一人の女性を連れて下りてくるのが見えた。

「あなたたちがティンファをこの街まで連れて来てくれた、アリトさんとリナさんね。どうもありがとう。私はティンファの祖母のファーラよ。お蔭で孫に会えたわ。この子とは、赤ん坊の時に会ったきりになっていたの」

ニコリと微笑む優しい笑顔がどことなくティンファと似ており、血の繋がりを感じてほっとする。

エルフの血が多いのだろう、祖母というよりは母親と言ったほうが違和感のない見た目の、優しそうで上品な感じの人だった。背はティンファよりも高く、リナさんよりは低い。

「こんにちは。アリトと言います。俺もこの街に用事があったので、気にしないでください。しばらくはエリダナにいると思いますから、またティンファを誘いに来ますね」

「こんにちは。リナリティアーナと言います。私はエウラナへ里帰りする途中なので、またエリダナの街を通りかかったら顔を出させていただきますね。ティンファもおばあさんに会えて良かったわね」

「はい、ありがとうございます！　おばあさんがエリダナにいる間はこの家で過ごしていいと言ってくれたので、ここでしばらく勉強したいと思います」

うん、いい笑顔だ。いくら祖母と言っても、会ったことがない相手を頼るのは不安だったはず。本当に良かった。このおばあさんなら、ティンファも上手くやっていけそうだ。

俺が旅に連れ出した気がして責任を感じていたけど、この人と暮らせるのなら、ティンファもあの村に一人でいるより良かったのかもしれない。

「ふふふふ。会えなかった分、おばあさんとゆっくりと語り合ってね。では、これで私たちは行きます。またね、ティンファ」

「またな、ティンファ。何かあったら、あの屋敷に遠慮なく来てくれな」

「はい！　ありがとうございました！　また、です」

「ありがとうね。また家に寄ってくださいね」

笑顔で手を振って別れることができ、肩の荷が一つ下りた気がする。

でも、ティンファの容姿は特殊だから、もの珍しさでいつ誘拐されるかわからない。

馬車の窓から見た街を行く人々は、様々な種族の特徴を持った人が多かったが、ティンファみたいに耳が羽になっているという人は一人も見かけなかった。

やはり騒動に巻き込まれないように、せめてこの街にいる間はアディーに警戒を頼んでおこう。

「アリト君は商人ギルドに寄るのよね？　私も討伐ギルドへ行くから、一緒に大通りまで戻りましょう。もうお昼だし、昼食を食べましょうか」

「いいですね。そうしましょう」

商人ギルドも討伐ギルドも、エリンフォードの国の外から入ってきたのだろう。どちら

も平原の街の大通りにあった。

こうやってリナさんと一緒に歩くのも今日までだ。そう思うと、しんみりしてしまう。

思えば、この世界で見た初めての街――イーリンの街から王都、そしてこのエリダナの街まで、リナさんとはずっと一緒だった。その間に一般常識から薬の調合まで、様々なことを教わったな。

でも、これで「さよなら」じゃない。「またいつか」だから。

大通りにある店に入り、エリダナの街の名物だという木の実が入ったパンと、野菜たっぷりの煮込みを食べた。

「色々ありがとうね。アリト君との旅は美味しいものを食べられたし、とても楽しかったわ。また、いつか一緒に旅をしましょうね」

リナさんとティンファには、すでに調味料を各種少しずつ渡してある。リナさんは「私も少しは料理を勉強しようかしら」と苦笑していたが。

旅の間に倒した魔物の素材も、すでに分配済みだ。

「はい。俺も一緒に旅をすることができて楽しかったです。リナさんたちには、本当に様々なことを教えてもらいました。おかげで、何とかこれからも旅をしていけそうです。当面はこの街にいると思いますが」

「ええ。……私も実家に戻って、ちょっとのんびりしようかと思っているの。しばらく仕

事の依頼もないと思うしね。何かあったらモランを使いに出すし、手紙も書くわ」
「はい。ありがとうございました、リナさん。また！」
「またね、アリト君。元気でね！」
食事をした店の前でリナさんと手を振って別れると、リナさんは討伐ギルドへ、俺は商人ギルドへと向かってそれぞれ歩き出す。
『アリト、リナとまた会えるよね？』
じっと俺を見上げるレラルを抱き上げ、そっと撫でる。
『ああ、もちろんだよ。また会えるさ』
『うん！』
レラルは旅の間ずっとリナさんと一緒に寝ていたので寂しそうだ。昨晩も最後だからと、リナさんがレラルを連れていった。
オースト爺さんのところから旅立った時は、スノーとアディーと三人だった。今はレラルもいるから四人。それでも、やっぱり少し寂しい気持ちになる。
その一方で、「また」と言って別れる人がこの世界でできたことをうれしくも思う。
この今の気持ちを胸に、俺は俺の旅をしよう。
「さあ、商人ギルドへ行って街を少し回ったら屋敷に帰ろうか。……戻ったらまた質問されて大変だろうな」

立ち読みサンプル
はここまで

街の中でも比較的新しい部分である大通りは、とても賑わっていた。
ナブリアの王都よりも活気があるように見えるのは、人種の多様さだけでなく、大通り沿いの店の全てに大きめのガラス窓がはめ込まれていて、店内の様子が見えるからだろうか。
キーリエフさんがガラスの製法を発見したのかな？　あるいは、キーリエフさんがこの街にいるから、最新の技術を研究する人が集まっているのかもしれない。
馬車の窓から見た、ゼラスさんに職人街と言われた通りを思い出す。煙突からは煙が立ち上り、通りは喧噪に満ちていた。
こうやって大通りを歩いている今も、この世界で見たどの建物よりも高い塔が遠くに見えている。あの塔は、キーリエフさんが研究のために建てたものだと、ゼラスさんが教えてくれた。
うーん。エリダナの街はこの世界で、一番発展しているってことなのかな。こんな均一なレンガの家なんて初めて見たし。ナブリアの王都よりも、さらに技術が進んでいそうだ。その全てがキーリエフさんの発明によるのだろう。
まあ、俺は日本で技術的な仕事をしていたわけではないし、電気の説明すらできる自信がないから、俺の話を元に発明するとしても限界はあると思うけどな。
屋敷で待っているだろうキーリエフさんのことを思い出し、元の世界のことをどう話そ